帝塚山大学現代生活学部紀要　第2号　33～39（2006）

倭文についての文献研究

植　村　和　代

はじめに

倭文という言葉は古代日本の諸文献にみられるもので，日本の文様という意味であるが，具体的には日本固有の織物をさしていると思われる。

しかし，中世以後にはみられなくなるようで，現代人にはなじみのない言葉である。

まずどのように訓むかであるが，これは後述する日本古代の諸文献からうかがうことができるであろう。『日本書紀』[1]には2箇所「倭文」の訓み方例がある。「斯図梨」と「之頭於利」である。また『万葉集』[2]でも「倭文」が多いが「志都」「之都」と書かれた箇所もある。『延喜式』[3]には十三社「倭文神社」の名がでてくるが，「倭文」の多くに「シトリ」「しつり」という振りかながある。

以上から「倭文」は古代に「しつ」「しづ」「しつり」「しづり」「しつおり」「しづおり」「しとり」「しどり」などとよばれていたらしい。基本は「しつ」であろう。詳細は後述する。

平成8年に発掘された，3世紀末の奈良県下池山古墳から，鏡面に付着した縞織物が出土したのであるが，これが「倭文」であると考えられる。ほとんどが絹であるが一部大麻を使ったと思われる（全て絹との説もある）縞織物で，奈良県立橿原考古学研究所に保存されている。

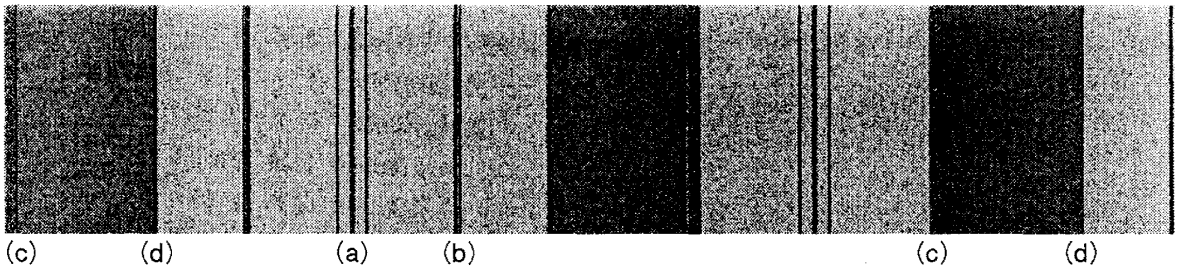
筆者は日本織物文化研究会の会員と共に，この下池山古墳出土の裂を再現研究する計画を持っているが，本稿では，この裂が古代「倭文」とよばれたものであることを，文献研究によって指摘したいと考えている。

文献は多岐にわたるが，よく知られている『日本書紀』『万葉集』『延喜式』のほか，『釈日本紀』[4]『古語拾遺』[5]なども検討する。また，鎌倉時代～江戸時代や現代の文献にも言及したい。

1　下池山古墳出土の縞織物

下池山古墳発掘調査の報告書はまだ出ておらず，「調査概報」が奈良県立橿原考古学研究所から発表されているのみである。

この概報によると，古墳時代前期，3世紀末と思われる天理市の下池山古墳から，埋葬施設とは別の小石室から大型仿製鏡が出土した。これは被葬者の遺体を護る呪物というより，むしろ墓そのものへ捧げられたのではないかという見方が示されている。この大型鏡に付着していたのが縞織物で，鏡を包んでいたものと思われる。青・黄緑・茶の縞から成り（図）経密度は



下池山古墳出土縞織物の文様パターン
「下池山古墳・中山大塚古墳　調査概報」より

1 cm 間に 70～80 本という緻密な裂である。

概報にもこれが我が国固有の織物である「倭文」と考えられるという指摘があるが，素材については，一部大麻が使われていると記されているものの，全て絹であるという見方もあるとされ，正式な報告書が待たれるところである。筆者は発掘され保存されて日も浅いうちにこの裂を顕微鏡で観る機会を得たが，青，黄緑，茶の色が縞状に鮮やかに残っており，緻密でありながら整然とまたゆったりとした織地とともに感動をもって観察した記憶がある。

2 『日本書紀』，『古事記』

『日本書紀』は養老 4 年（720）に舎人親王主裁のもとに完成した日本最古の勅撰の歴史書である。もと『日本紀』と称していたともいわれる。その編集の課程は不明ではあるが，長期間を費やして完成したと考えられる。

『日本書紀』には，まず巻二「神代下」に「倭文神建葉槌命を遣わせば服いぬ。・・・倭文神，此をば斯図梨俄未と云ふ」とある。建葉槌命は，出雲の神々を平定した時最後まで抵抗した星の神を服従させたという。この神が倭文の神であるという。注 1）の岩波文庫版では「斯図梨」を「しとり」と訓み，『国史大系・日本書紀（吉川弘文館・昭和 41 年刊）』では「シヅリ」と訓んでいる。「しどり」という言い方が「倭文」の訓みとして一般的ではあるが，このように，訓み方は必ずしも一定していない。我々の研究会では「しず(づ)り」と言っている。

次に巻六「垂仁天皇」に，石上神宮の神宝を作って収めた集団（部）の中に「倭文部」が出てくる。倭文は宗教的な性格を帯びた裂であることがうかがえる。

巻十四「雄略天皇」には，「倭文纏の胡床に立たし・・・」とある。天皇が日本古来の美しい倭文を巻いた胡床に腰をお掛けになっている，という意味である。

巻十六「武烈天皇」には，「大君の御帯の倭文服結び垂れ・・・」という歌がある。天皇が倭文の帯を結び垂らしておられるという意味である。

更に巻二九「天武天皇」に「倭文連」という言葉が出てくる。「此れをば之頭於利と云ふ」と続くので，この場合は「倭文」は「しつおり」と訓むようである。

『日本書紀』に表された「倭文」は神や天皇，宗教に深く関わっているように思われる。

なお『日本書紀』と並び古代の文献として著名な『古事記』[6]であるが，「倭文」という文字

は出てこない。わずかに，ある歌謡について（「仁徳天皇」）「・・・志都歌の歌返しなり。」という記述があるが，この「志都」が倭文を指すのかどうかは不明である。

3 『万葉集』

主として7世紀後半から8世紀前半までの飛鳥・奈良時代にわたり，広範な作者群の生活が如実に詠み込まれていることで知られる『万葉集』であるが，ここには「倭文」「志都」「之都」を含む歌が十首見られる。順を追って検討する。

355　大汝　少彦名乃将座　志都乃石室者　幾代将経（大汝と少名彦名がいましけむ，しつの岩屋は，幾代を経ぬらむ）

431　古昔　有家武人之　倭文幡乃　帯解替而・・・（いにしえにありけむ人がしつの帯を解き替えて・・・）

672　倭文手纏　数二毛不有・・・（しつの環のように，数にもあらぬつまらないわが身を・・・）

804　阿迦胡麻爾　志都久良宇知意伎・・・（赤駒にしつ鞍をうち置いて・・・）

903　倭文手纏　数母不在　身爾波在等・・・（しつの環のように，数にもあらぬつまらない身ではあるが・・・）

1809　倭文手纏　賤吾之故・・・（しつの環のように，賤しい我ゆえ・・・）

2628　去家之　倭文旗帯乎　結垂・・・（いにしえの，しつはた帯を結び垂れて・・・）

3286　倭文幣乎　手取持而　・・・（しつぬさを手に取り持ちて・・・）

4011　神社爾　底流鏡　之都爾等里蘇倍・・・（神の社に，照る鏡をしつに取り添えて・・・）

4236　木綿手次　肩爾取掛　倭文幣乎　手爾取持而・・・（ゆうだすきを肩に取り掛け，しつぬさを手に取り持ちて・・・）

これらをみると，355では建葉槌命と関わりのある出雲の神，大汝と少彦名の名がでてくるのが興味深く思われる。

672・903・1809は，倭文をしづと呼ぶと思われ，賤つまりいやしい，つまらないの意で使われている。いずれも環（たまき）に掛かっている。倭文は古い織物で，舶来の新しい織物より劣ること，裂の環が玉の環に劣ること，の両方の意味が込められているようにも思える。同工異曲で，すでに慣用句化している。

431と2628は，倭文が既にいにしえのもの，つまり古い昔のものという意味になっている。帯に掛かっているのも共通で，これも既に慣用句のように使われており，多くの人々が，倭文―古―帯　を連想して使っていたようである。

3286と4236には，木綿（ゆう）だすきと共に，倭文ぬさという言葉が使われており，たすきを肩に，ぬさを手に，という動作は，神に祈る様を表すものと思われる

4011には，鏡と倭文がセットで歌われている。下池山古墳の鏡と縞織物の状況を彷彿とさ

せる。

万葉集の諸歌から，倭文には帯・環・鞍・幣などの多岐にわたる用途があったことがうかがえる。神に祈る際，鏡と対にするということが，とりわけ興味深く思われる。

なお，歌ではないが

4372に「右一首倭文部可良麿」と作者名があり，「倭文部」という倭文製作の専門集団の存在を示している。

4 『延喜式』

『延喜式』は平安初期の官選法文で，王朝政治の事務章程を規定した現存唯一の古文献である。「倭文」はこのうち「神祇」の部分に多く記載されている。

例えば，巻第一「神祇」には

社一百九十八所。

座別絁(キヌ)五尺。五色薄絁各一尺。倭文(シトリ(しつり))一尺。木綿二両。麻(ヲ)五両。庸布(チカラヌノ)一丈四尺。倭文纏刀形。倭文三寸　絁纏刀形。絁三寸

など倭文の文字が数えきれないほど出てくる。

神事に使用する倭文は，帛，絁などの次に記載され，その後に木綿や麻が記されている。つまり帛や絁といった絹織物の次，植物繊維の前にあって，一般的な名詞として扱われている。倭文は絹や麻と共に，ある特徴を持ったよく知られた織物であり，神事に関連した裂であることがうかがえる。縫殿寮という衣服を扱う部署には記載がなく，日本固有の織物であるが衣服ではなかった，と考えざるをえない。ただし，『日本書紀』や『万葉集』でみたように，帯に使われていた例はあるが，帯は衣服の中でも特に呪的要素が強いため，倭文はやはり宗教的，呪的な性格を持っていたと思えるのである。

また「主計上」に「倭文調布・・」の文字が見え，駿河国の調に「倭文三十一端」，常陸国の調に「倭文三十一端」が見える。調としても納めていたらしいが，その用途は分からない。

巻九「神祇九」には神社名が列記されている。いわゆる式内社である。そのうち倭文にかかわる名をもつ神社を挙げてみる。

大和国	葛下郡	葛木倭文坐天羽雷命神社（天羽雷命は建葉槌命と同神とされる）
伊勢国	鈴鹿郡	倭文神社
駿河国	富士郡	倭文神社
伊豆国	四方郡	倭文神社
甲斐国	巨麻郡	倭文神社
常陸国	久慈郡	静神社
近江国	滋賀郡	倭神社
上野国	那波郡	倭文神社
丹後国	加佐郡	倭文神社

与謝郡　　倭文神社
但馬国　朝来郡　　倭文神社
伯耆国　川村郡　　倭文神社
久米郡　　倭文神社

これらの神社のうち，昭和52年に刊行された『全国神社名鑑』（全国神社名鑑刊行会史学センター）には，次の6社が記載されている。

茨城県　那珂郡　　静(しず)神社　祭神　建葉槌命
群馬県　伊勢崎市　倭文(しとり)神社　天羽槌雄命
山梨県　韮崎市　　倭文(しずり)神社　天羽槌雄命
京都府　与謝郡　　倭文(しどり)神社　天羽槌雄命
鳥取県　倉吉市　　倭文(しどり)神社　武葉槌命
東伯郡　　倭文(しとり)神社　建葉槌命・下照姫命

これらの神社のうち，茨城県つまり常陸の静神社と鳥取県東伯郡つまり伯耆の倭文神社が共に『日本書紀』に記された「建葉槌命」を祭神としている。また下照姫は出雲の神につながる。伯耆は出雲の近くであり，鳥取県東伯郡の神社周辺には，古来倭文の部民が多数居住していたと伝えられている。

5　『釈日本紀』，『古語拾遺』

『釈日本紀』は卜部兼方が文永11年（1274）か翌年に著した，『日本書紀』の注釈書である。父の卜部兼文が前関白一條実経などに講述したものなど，私記・旧説を編集したものである。この巻八，述義四の「神代下」に「倭文神」の項がある。

「倭文神　　大問云。此神在何処。先師申云。坐常陸国。・・・倭文者常陸国之所済也。・・・重問云。倭文。其形躰如何。先師申云。古語拾遺。文布云々。号綾布之類歟。建久諸祭興行之時。大蔵省年預申状有青筋文之布云々。」

ここに，重要な指摘「倭文は青筋文の布」が出てくる。もっとも「綾布の類か」とも書いているのであるが，建久諸祭以下の記述は具体的であり，説得力がある。はじめて，倭文の特徴が浮上したのである。

ここに出てくる『古語拾遺』も検討したい。この書は祭祀関係氏族の斎部広成が大同2年（804）平城天皇に撰上したものとされる。「古語の遺(も)りたるを拾う」という題であり，西宮一民によると，祭祀を主とした年中行事の事物起源の「便覧」的な便利さゆえ，よく利用されたであろうということである。

倭文は，天照大神が怒って石窟に籠ったため，神々が何とかその心を和ませようとする場面に出てくる。思兼神が神への捧げ物として鏡などと共に

「天羽槌雄神（倭文が遠祖なり。）をして文布(しつ)を織らしむ。」とある。

『日本書紀』に基づいているはずなのに，建葉槌が天羽槌雄となっている。羽は衣服のこと

なので，わが国固有の織物である倭文の祖神としたのであろうが，詳細は分からない。なお，前述した『全国神社名鑑』には，倭文神社の三社が天羽槌雄命を祭神としており，『古語拾遺』の影響を受けていることが考えられる。

6　その他の文献

「しづ」で有名なのは，源義経の一生を描いた『義経記』に出てくる「しづやしづしづのおだまき繰り返し昔を今になすよしもがな」であろう。静御前の歌として記されているが，名前の静と卑しいの賤，苧環（おだまき）に関わりのある倭文が掛詞になっている。成立年代は鎌倉と室町の両説があるが，中世までは倭文がよく知られた言葉であったことを思わせる。苧環は麻糸を巻いた状態を指すので，この倭文は麻織物ではないかと考えられる。

なお，この歌の本歌は『伊勢物語』三十二にある「古のしづのおだまきくり返し昔を今になすよしもがな」であり，更にその本歌は，『古今集』雑上の「いにしへの倭文のおだまきいやしきも良きもさかりはありし物也」である。

時代は下るが，江戸時代の新井白石[7]と本居宣長[8]の文献も検討したいと思う。

白石の随筆集「東雅」に倭文についての文章がある。『古語拾遺』，『倭名鈔』，『釈日本紀』などの引用があり，これまで筆者が述べたような記述があるが，「シヅとは筋をいふに似たり」と記しているのは疑問である。倭文の本来の音は清音「シツ」であったと思われるので，「筋」に通じるとは考えがたい。

宣長も随筆集のなかで「シヅリ」と訓して倭文を取り上げている。『釈日本紀』，『万葉集』，『駿河国風土記』，『常陸国風土記』など幅広く引用し，新井白石の説も紹介している。

本稿でも，古代の風土記に関する文献をもっと検討したかったのであるが，時間が足りず課題として残ってしまった。

お　わ　り　に

以上みてきたように，「倭文」は本来「しつ」と訓む日本固有の織物であり，その特徴は青筋文つまり青色の多い縞織物であろうと考えられる。既に古文献に「いにしえの」とあるので，その起源は相当古いとみられる。素材は絹か植物繊維かという問題や，大きさの問題もあるが，素材や大きさは一定しておらず，青色の縞織物であり，宗教的，呪的要素の強いものであったということが特徴であると考えられる。用途は様々であるが，鏡とのセットがあることから，下池山古墳出土の縞織物が「倭文」である可能性は極めて高い。

なお，大野晋の『日本語の起源』[9]には，「シツ」に対応するタミル語 tettu の意味は「組紐で編む」であり，袋物を作るのに使いその材料は木の繊維，とある。難解な「しつ」の語源研究の参考になりそうである。

倭文は賤と重なる言葉として使われたり，絹織物の次に記載されたりしているところから植

物繊維で作られたものも多数あったのではないだろうか。木綿(ゆう)や麻は絹よりも神事に使われることが多いので，倭文の材料も植物繊維が多かったかもしれない。

倭文の起源だけでなく，縞の起源なども含めてまだまだ考えるべきことは多い。

注

1）日本書紀　坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野　晋　校注　岩波文庫　1994年
2）新校万葉集　澤潟久孝・佐伯梅友　著　創元社　1965年
3）延喜式　正宗敦夫　著　日本古典全集刊行会　1927年
4）釈日本紀　黒板勝美・国史大系編集会　編　吉川弘文堂　1965年
5）古語拾遺　西宮一民　校注　岩波文庫　1985年
6）古事記　倉野憲司　校注　岩波文庫　1980年
7）新井白石全集　国書刊行会編　国書刊行会　1977年
8）本居宣長全集　本居清造編　吉川弘文館　1927年
9）日本語の起源　大野　晋　著　岩波新書　2000年